

## 2008 年度アジア・太平洋研究センター活動報告

### アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2008 年 5 月 27 日（火）

場 所：名古屋キャンパス J 棟 1 階 特別合同研究室

発表者：鎌田真弓（名古屋商科大学教授）

テーマ：ダーウィン爆撃とオーストラリアの太平洋戦争  
——国民的体験の創造のプロセス——



1. ダーウィン爆撃：国民的体験の物語
2. ダーウィンの歴史
  - 1) 多民族社会ダーウィン
  - 2) 海域アジアとオーストラリア，日本：真珠貝，ナマコ漁のネットワーク
3. ダーウィン爆撃の「記憶」
  - 1) ダーウィン爆撃の「語り手」
  - 2) 「記憶の装置」
4. ダーウィン爆撃の公的記憶：歴史再発見の政治力学
  - 1) 国家のアイデンティティ創出と太平洋戦争の記憶
  - 2) 太平洋戦争のアイコンとしてのダーウィン爆撃：本土防衛の国民的体験の共有
  - 3) ダーウィン市，北部準州政府主導のキャンペーン：周辺地域から国民的体験の現場へ
5. 地域史の視点からの戦争：語られない戦争体験

北部準州の州都ダーウィンは、オーストラリア大陸では最も北に位置する都市である。もともとは1839年に「発見」された天然の良港で、アラフラ海やチモール海に面する大陸北部から内陸部への玄関港として発展した。金鉱山で働く中国人クーリー、居留区のアボリジニ、真珠貝採取労働者の日本人などのアジア系住民が人口の多くを占めた。熱帯サバンナの厳しい気候のために、大陸北部への白人の入植はなかなか進まず、20世紀に入ってもオーストラリアの中心部である大陸の南東部とダーウィンを繋ぐ鉄道や道路はなく、航路でつながれるだけであった。

太平洋戦争は、北部オーストラリアをオーストラリアの遠隔地として、機能的にも、また国民の意識の中にも完全に組込む契機となった。まず第一に、真珠貝産業のように、アラフラ海を通じて繋がっていた経済圏は分断され、北部オーストラリアとアジアや南洋との人の往来が遮断された。第二に、大陸南部に住む大半のオーストラリア国民は、国防の危機に際して初めて、大陸北部やニューギニアの存在を意識し、その地域を国防の最前線として認識した。第三に、北部防衛のためのインフラ整備によって、陸と空で大陸南部の「中心」地域とつながり、北部は「北の遠隔地」となった。

さらに近年、ダーウィン爆撃は国防の最前線の出来事として再解釈され、遠隔地のローカルな歴史ではなく、国民的体験としてオーストラリア正史に位置づけられることになった。オーストラリアでは、第一次大戦以降、国民の戦争体験が国家のアイデンティティの創出に大きな役割を果たしてきたが、日本軍による64回もの爆撃を受けたダーウィンは、オーストラリアの「真珠湾」とされ、第二次大戦の国民的体験の1つの象徴となっている。こうした公的記憶を確かなものとしてきたのは、毎年開催される追悼式典や戦争記念碑であり、これは「記憶の装置」として機能しているといえる。ダーウィン市や北部準州政府も、ダーウィン爆撃の歴史の主流化に積極的に関与してきた。特に、1992年のダーウィン爆撃50周年や2001年の連邦結成100周年の追悼式典は、連邦政府の要人や海外の来賓の出席のもと、国家的行事として開催された。その後市中には多くのダーウィン爆撃の記念碑が建立された。

その一方で、アラフラ海で繋がっていた人々（ダーウィンの中国人、日本人、その他アジア系の人々、先住民など）の戦争体験や生活圏への影響は「忘却」されている。「記憶」の構築や「歴史の再発見」の過程では無数の「忘却」が起きるように、「国民の物語」に回収された戦争の記憶からは、戦争によって国家から排除されたり、生活圏から分断された人々の多様な個人的体験は抹消されてしまう。多文化化や先住民の権利主張など価値の多様化が進むオーストラリアにおいて、国民的体験としての戦争の記憶は、国民としての連帯感を創出する力として働くが、それは同時に、非正統な国民を周縁化し、集団的記憶の多元性を不可視化する危険を孕むものである。

(文責：小林寧子)